

九 気になる傷口

ある日のことであった。

強い西陽を避け、三郎は菩提樹の木蔭でくつろいでいた。山での瞑想を終え、この日は早めに帰って来たのである。三郎の膝には小さな子犬が戯れていた。

するとカリアッパ師が二人の侍者を連れて三郎のすぐ前を通りかかったのである。三郎は急いでひれ伏した。だが子犬はその手にじゃれついて離れようとしない。

「教われよ……」

師はそんな軽い一声を残して畑の方へ遠ざかって行った。三郎は、犬に芸でも教えろ、と言っているのかと思いつながら、再び小犬を抱き上げたのである。

そして、翌日の日暮れ時であった。また三郎は小犬を抱いて菩提樹の蔭にいと、またカリアッパ師が通りかかったのである。

「教われよ」

と、言うこともまったく同じであった。もともと三郎は、犬の犬好きではあったが、さりとて訓練ともなると、誰もがそうであるようにさしたる知識は持ち合わせてはいなかった。だが、師がそうまで言われるなら、何か教えてやらなければならぬまい、と考えたりするのであった。

そのうち三郎は、ふっと子供の頃本郷の家で飼っていた犬のことを思い出した。懐かしいかぎりであったが、こうして何かにつけて三郎の心はずぐ故郷の方へと帰っていく。

そして、またまた次の日の夕方、そこで犬ともにいる三郎の前をカリアッパ師が通りかかったのである。まあ狭い部落のことであるから、別に不思議はないのだが。

「よく、教われよ」

これまた同じだったが、今日はそれだけではなかった。

「その犬は、お前のよい指導者になってくれるからな」

と、言ったのである。一瞬三郎は何のことやら分からなかったが、どうやら自分の考えていることとまったく逆であると気づいた三郎は、急に体が熱くなるのを感じた。いかに師の言葉とは言え、あまりにも人を愚弄している。ひれ伏している顔をそっと上げると、

「いくら私が愚かでも、犬より劣るとは思いません」

と、突っかかるように言った。すると師は、

「そうかな？」

と、またいくぶん揶揄ぎみに言う。三郎はいっそう不愉快さをつのらせた。

「では、いったい何を、犬から教われと言うのですか？」

「生きる道だ。この犬の方が、お前よりは遥かに完全な生き方をしている。お前は人間のくせに、この犬の半分も完全な生き方をしていない。だから、教われと言ったのだ」

思わず三郎は草をにぎりしめた。口惜しさのあまりであった。

「分からないかな。それでは、分かるようにしてあげよう。その犬を連れて、私の家の前で待っていないさい。私もすぐ行くから」

そう言うのと、師はまた畑の方へ去って行った。

集会所のすぐ脇にある大聖者カリappa師の家は、小さいながら草葺き屋根の整った家であった。そして、その周囲も、常に誰かによって掃き清められ、塵一つ落ちてはいなかった。

だいたい、ヒマラヤ山麓の住人は、たとえ粗末な家であっても、おおむね清潔さが保たれていて、庭先には植木や草花が植えられているという具合に、きわめて日本人的な好みを持っている。熱帯樹のバナナなどがなければ、あたかも日本の農家の庭先にいるような、そんな錯覚さえ湧いてくるのであった。

三郎が師の家の前でしばらく待っていると、やがて師が姿を見せた。そして、三郎を家の中へ入れた。中はすべてが土間になっており、石畳が綺麗に敷きつめられて、いかにも涼しげであった。足の裏がひんやりとするのである。

師は、木で作られた椅子に腰を下ろすと、軽く手を前のテーブルに置き、立っている三郎に言

った。

「お前は、文明の国アメリカで、医学を学んだのだな」

「はい、そうです」

「それで、その学位まで持っていると言うなら、病人はずいぶんお前を頼りにするだろうな」

「……………」

カリappa師にそう言われると、三郎も面映ゆい思いであった。

「そのお前が、どうして自分の病は治せないのだ。おかしいではないか」

思いもしなかった質問である。だが三郎は、結核という病は現在の医学ではまったく治せないのだ、たとえ自分が医者であろうがそれは関係ありません、と答えたのである。実際、誰もがそう思っていた。

すると師は、

「お前の頭では、その程度のことしか考えられないのか」と、鋭い目を三郎に向けた。

「お前が見てのとおり、このような文化の匂いもしないような山奥に住んでいても、われわれはみだりに病などにはかからない。まして、お前のような病を持った人間が、この部落に一人でもいるか。いないだろう」

三郎は、はいとばかりにうなずいた。

「それもだ、齡をとった人間ならともかく、お前はまたそんなに若いではないか。まして医学のある文明の国に住み、その上、人の病を治さねばならぬ医者であるなら、それだけほかの人よりは病にかかりにくいはずだ。知識もあるし、それだけの技術を持っているのだから」

言われてみればそのとおりである。初めて聞かされる意外な論理であったが、そうあらねば確かに理屈としては合わないことになる。ところが今までは、教養もない無知な人間なんていうのは、体だけは頑丈で、どんな労働にも耐えられるが、知識階級の人間はどうしてもひ弱なものなのだと思ひ込んでいた。

それが当然のこととして心の中にあっただけに、師の言葉はその常識を打ち破ったものであった。三郎は、改めてそのことに思いを馳せ、今まで自分だけではない誰しもがそう思っていたことが、実は何の根拠もない考え方であった、と思わざるをえなかった。

とにかく、カリアップベ師という人は、三郎にしてみれば、奇想天外と言うか、まったく思いもよらぬことを次々と言う人であった。発想がまるで違う。そしてそれが、いつも師の方に正当性がある、といやいやでも認めざるをえなかったのである。

「お前は、自分が間違った生き方をしているとは思っていないのだな？」

「ええ、もちろんです」

「そうだろうなあ。もともと、承知してやっていたら、それは気狂いだ。しかしな、自分では間違っていないと思っただけ、私の目からすれば、お前の生き方などは、もう間違いだらけもい

いところだ。医者のかせに病にかかったり、それも治せず苦勞しているのだからな」

「……………」

「第一な、お前は明けても暮れても、体のことばかり考えているだろう。少しは、心のことを考えてやったことがあるのか？」

「それは考えています。いえ、私くらい、心のことを考えている人間はいない、そう思うくらいです」

三郎は、心のことを考えていない、などと言われること自体に、強い不満を感じた。

「そうか、考えているのか。でも、お前の言う心というのは、熱が上がりはしないか、息苦しくなるんではないかと、体を心配する方の心ではないか」

「……………」

「私が言うのは、そんな心のことではないぞ。お前が体を大事にするのと同じように、心そのものを大事にする、そういう心のことだ」

小犬を抱いたまま、三郎は答える術もなく、ただ黙って立っていた。すると師は、すっと立ち上がり、壁のところにかかっている棚の上から鉢を取り出した。こうした文明の利器も、ダーズリンなどから、米との交換で入手するのである。

師は、再び椅子にかけると、三郎に、

「ちょっと、その犬を貸してごらん」

と、言った。そつと三郎が手渡すと、師はテーブルの上に小犬を押さえ込み、右手の鉄で小犬の前脚を軽くちよんと切ったのである。

「キャン、キャン」

鋭い声を上げ、小犬は師の腕の中で暴れた。押さえられている前足からは、血がぼたぼたと滴り落ちていく。何という乱暴なことをするのか、師らしくもない、と三郎は肩をひそめた。そんなことには構わず、師は小犬を三郎に返しながら、

「今度はお前の番だ。手を出してごらん」

と、言う。えっ……と三郎はためらった。

「さあ、早く」

やむなく三郎は、左手で小犬をしっかりと抱くと、あいている右手をそつと師の方に出した。師は三郎の手首をつかむと、犬と同じように皮膚をつまみ上げ、無造作に鉄でちよんと切った。真紅な血が手首をつたって糸をひいていく。

「さあ、どっちが早いかな、治りっこしてみる」

師はそう言うのと、びしっと、切ったすぐそばを軽く叩いた。

夕闇の迫った広場を、小犬を抱いた三郎がとぼとぼと帰って行く。こんな暑いところだ、化膿でもしたらどうするのだろうか。消毒もなければ傷薬もない。そう思うと三郎はいっそう恨めしくなる。師が何を考えているのか、三郎にはさっぱり分からなかった。

それから一週間、三郎は呼ばれてカリアップ師の家へ行った。もちろん小犬を抱いてである。

「まず、犬の傷口を見せてごらん」

師の言われるとおり、犬の前足を見せた。

「おお、綺麗にふさがっているな。これなら跡もすぐ消えてしまいうだろう。さて、お前の方はどうかな」

そつと三郎は右手を師の方に出した。見ると、傷口の周囲は赤く腫れ、明らかに化膿の兆しきざしがそこには見られたのである。

「やっばり、お前の負けだな」

「えっ……？」

「お前の負けだ、と言っているのだ」

「それは無理ですよ。犬ですから」

「ほう、妙なことを言うねえ。犬ならどうして人間より早く治るのだ？」

「それは……」

そう言いかけて、三郎はぐつとつまってしまった。当たり前ではないですか、とでも言いたかったのだが、それではなぜ当たり前なのか、と追いつめを食いそうで、出かけたその言葉もやむなく呑み込んでしまった。

師は黙って三郎を見つめていた。そして、三郎が完全に反駁を諦めたとみるや、師は再び静か

に言葉をつづけたのである。師の話は、いつも相手に充分ものを考えさせるだけの間というものを与えていく。それは、相手への思いやりと心の余裕とが常にそうさせるのであった。まして三郎の頭の中には、曖昧な近代合理主義しかないのであるから。

「その理由はな、ただ一つ、お前の心の中にあるのだ。この一週間、お前は暇さえあれば傷口を眺めてそれを気にしていたらう」

言われたとおり三郎は化膿を恐れていた。医薬品がいっさいないことが不安の種となっていたのである。

「しかし犬の方は、切られた時にはそれは痛がる。だがその後はもう忘れている。時折り舐めるくらいのことはするけどな。ところがお前はどうか。心配という負担を心にかけて放した。どうだ、心を大事にしていけない証拠だらう。だから、こういう結果になるのだ」

「……………」

「いいか、お前のように神経を過敏にして、毎日、傷口や病を気にしていたら、治る病も治らないし、傷口だってふさがらない。病を治す秘訣は、この犬のように病や悪いことを忘れてしまうことなのだ」

そう言われて、三郎は初めて心に共感を得た。そうした考えを、今までにまるで知らなかったというわけではない。何かの折りにいく度か耳にしてはいたのだが、あくまでも一つの俗論として受け止めていた。それでいて、科学的な容認とはほど遠いものではありながら、医師としての

体験や自身の症状の変化から、何となくその正当性を感じてはいたのである。

「少しは見当がついたかな。それでは今日は、私がエジプトのカイロで、お前に初めて会った時に言った、あのことを少し教えてやろう」

師は、三郎に椅子をすすめると、ゆっくりとした口調で語っていったのである。

「私はあの時お前に『大事なことに気づいていない。それに気づけば、死なずにすむ』そう言ったね」

「はい」

三郎の心は弾んだ。いったい師の口から、どのようなことが語られるのだろうか、と大きな期待を持ったのである。

「それはな、こういうことなのだ。いわゆる文化の低い民族というのは、その面から言えば、すべてに価値低く、そして不幸であるはずだらう。お前のように文化文明の智を持っている人間よりはな」

「……………」

「ところが、実際にはどうか。お前が見てのとおり、ここでは、誰もが肉体は完全な強さを發揮している。心の方とお前とは違って、皆安らかであるし、また豊かさも持っている」

「むやみやたらに肉体を案ずることもなければ、分に過ぎた欲望も持っていない。心も体も、

ともに大事にして生きている。だからこそ丈夫でいられるし、また幸せでもありうるのだが、それが生命を救う正しいあり方だということをよく承知しているからなのだ。ところが、とかく文明の国の人間というのは、それにとらわれて、そうした生き方ができずにいる。だから、生命を守ってくれる力というものが出てくれないのだ。そうすると、病にもかかりやすいし、またかかった場合には、治りにくいということになる」

「……………」

「お前にしても、朝から晩まで病を気にして、やれ熱があるの、やれ息苦しいの。まあ、この頃は私に言われたから、口にはしなくなったが、それでも心の中では気にしているのがよく分かる。お前の顔にそう書いてある。しかしな、それがお前の生命にとって、どれだけ大きな負担になっているか、その大事なことをお前は少しも考えていない。だから、病が治らないのだ」

惹きつけられるように三郎は聞いていた。師の言うところが、自分の欠陥をあますところなく衝いている、と本能的に感じていたのであった。

実際に、三郎自身が医者としての体験から言っても、神経質な病人人というのはどうも治りが遅い、そんな実感を持っていたのである。この程度ならもう治っているはずだが、と思うのだが、思うとおり治らない。そういう患者に共通しているのが、やたらに神経質になるということだったのである。

と言っても、それはたんなる印象であって、それ以上には一歩も進まない。精神と肉体との相

関関係などは、明治から大正、そして昭和に入ってからでも、まだ医学として取り上げられるような段階ではなかった。

心は哲学や心理学の分野であったし、肉体は細胞病理を主体とした肉体のみを対象とする医学で、心の影響が入り込む余地などはまったくなかったのである。

医師である三郎が、何となくそうは感じながらも、それ以上には一歩も出られなかったのも当然であったし、医学はあくまでも科学であるから、科学的にこれを捉えようなどということとはまったくの不可能事であった。

これが科学の俎上に乗せられたのは戦後になってのことで、戦場での恐怖からくるさまざまな肉体的疾患を根拠として研究が始められ、精神身体医学なるものがようやく米国の若手医師たちによって樹立されたのだが、今となってはこの名も古めかしいものとなってしまった。

だがその後、ハンス・セリエの刺戟学説が登場し、人々の目が大きくそちらへ向けられていたのは幸いで、今日では、心が原因でなる病、つまり心因性というような言葉がすっかり世の中に定着したようである。

科学の歩みはこのように遅かったのだが、研ぎ澄まされた直観をもって、こうだ、と断定していく哲学は、実験も実証も要らないから、それだけにその歩みも早い。遠いその昔から、修行のもととなる肉体を損なわぬために、またより良くせんがためにも、心に負担を与えてはならない、と教えられてきたのであった。

実際、生命の力を削がれてしまったのでは、治るべき病も治らない。また、病を招くことにもなる。逆に、生命の力が強ければ、悪い病原菌としてその肉体には食い込めない。これらの力を、今日では自然治癒力とか、自然良能力とか、あるいは恒常性維持の働きなどと言っているが、もっと大きく捉えれば、この力があるからこそ人間は生きていられるので、この力が零になれば死となる。

実に、生体と屍体との区別は、この力の有無によるので、死んだ当座は細胞の変化があるわけではないし、細胞の数が減ったわけでもない。少なくとも、肉体という物質そのものはまったく同じなのである。だが、一方は生体であり、一瞬を境にして一方は屍体となる。

なぜ心臓が動いているのか、今日の医学でもこれはまったくの謎である。動き方は分かっていたが、なぜ動きつづけるのかが分からない。いまだ神秘の中に厚く閉ざされているのだが、この重要な事柄に関しても、ヨーガの哲学は明解なる指針を持っている。今日風にそれを言うとは結局こういうことになる。

電動機が動いている。だが、電源を切られると瞬時にして止まる。電気という、これも不思議な力を、与えるか与えないかによって、機能するしないが決まる。いみじくも科学でも気という言葉を使っているのだが、確かに電気も、この空中に限なく遍満存在している。発電機は、ただそれを集約し、それを電線で配給するにすぎない。

人間を生かし、心臓を動かしている、何らかの力も、この世に限なく遍満存在している。そしてそれが体内に受け入れられた時、それは命と呼ばれるものとなる。命、すなわち大宇宙に存する一つの気が働いている間は生きているが、これが電源を断られたと同様に働かなくなった時死が訪れる。

しかも、この生命力なるものは、各人によってその受けいれる分量が違う。多く受け入れれば生命力は強いものとなるし、その分量が少なればか弱い生命となる。自然治癒力なるものも当然この中に包含されるわけだが、その生命力を分量多く受けいれるにはどうすればよいか。

その分量を決定するのが、実はその人の心の状態なのだ、と言っているのである。心の状態が建設的であれば建設の気が多く体内に入ってくるし、心が破壊の状態にあるなら気も当然破壊の気が多く入ってくる。ちょうど鋳型に注がれる赤い鉄のように、心の鋳型とおりの気が入ってくるのだ、と言っているのである。同気、相引くである。

だからこそ、健康を回復させ、また保ちたかったら、心の状態をまずそこへ持っていく、かりにも破壊の気を呼び込むようなことはするな、心に負担を与えるようなことはするな、ということになる。治らないと思ひ込んでいたのでは現実もそのとおりになるぞ、と言っているのである。これは、健康という肉体面のみならず、すべての事柄に当てはまるもので、万事がその人の思う方向へと現実も動いていく。失敗するだろう、駄目だろうと思えば、そうなる確率は高くなるし、大丈夫、できると確信すれば、その可能性も高くなる。

人間の思考、つまり脳細胞の離合集散運動も、今日では静電氣的な働きとされているが、言う

なれば精巧きわまりない電子計算機なのである。これを破壊の方へまわすなと言うことで、悪い資料ばかり入れていたのでは悪い判断しか出てこない。

その破壊の気の代表として、後年中村三郎は、悲しみとか怖れ、怒りなどを挙げてはいるが、実際、これらの感情はその人の人生を破壊へと導いていくだけである。しかし、どうしても怒らなければならぬなら、公的な社会的な怒りであるべきであろう。とは言え、そうと分かっただけで解決する、という具合にもいかない。だからこそ、その感情の統禦に向かつて、さまざまな行があり、心得というものがあるわけである。

なお、本来、完全を志向する生命に、なぜこのような生命を損なうような心が存在するのか、という素朴な疑問も出てくるのだが、それは、今でこそ必要ないが、その昔人類がまだ進化していない時には、やはりこれらの消極的と言えぬ感情もなくてはならぬ存在だったのである。

と言うのは、怒ることによって敏捷性を刺戟するホルモンが分泌されるし、筋も緊張して闘うには恰好の条件が整えられてくるからで、その時代の人類には、ほかの動物とまったく同様にやはり必要だったのである。それが、これだけ進化した今日でも、盲腸や尻尾の骨のように残っている。だからこそ中村三郎が言うように、不要な残留心だと言うわけである。

したがって、これらの感情にとらわれるような人は、いまだ進化の度合いが足らぬ人、と言うことになりそうだ。

十 われじぎより来る

素晴らしい芳香に、三郎はうっとりとした。何とも言えぬ甘い香りが、辺り一面に漂っているのであった。無数の小さな梢から発せられるその香氣に酔いながら、しばらく行くとそこが峠であった。

そして、毎日通うこの山径ではあったが、峠へ来ると、やはり巨大なカンチエンジュンガの威容に心を打たれるのであった。そこには、いつ見ても変わらぬ尊厳さと清浄とがあったからである。朝日に輝く超俗的な容姿は、ともすると暗い悲観的な方へと傾く三郎の心を、いつも洗い清めてくれるのであった。これも大自然から与えられる暗示の大きな効果であった。だから人間は、汚ないところに住むよりは綺麗なところに住む方がいい。たとえ質素であろうと、清潔な環境の方がいいに決まっている。そして、故郷の山々は知らず識らずのうちに心を豊かにしてくれるし、目に入る青葉若葉は人の心を和ませてくれる。

カリアップベ師はロバに跨ったまま、三郎はそのすぐ横で、遠い彼方に広がるその壮大な光景に